

[論文]

発見文脈における日本語と韓国語の過去形

齊藤 学 崔 榮殊

— 目 次 —

1. はじめに
2. 先行研究
3. 観察行為と認識の変化・知覚の変化
4. 検証
 4. 1. 状況0
 4. 2. 状況a
 4. 3. 状況b
 4. 3. 1. 状況b1
 4. 3. 2. 状況b2
 4. 4. 状況c
5. おわりに

キーワード：認識変化、知覚変化、過去形

1. はじめに

本論文では、発見の文脈における日本語と韓国語の状態述語の過去形の使用条

SAITO, Manabu 総合教育研究センター、博士（文学）、言語学・日本語教育
CHOI, Youngsoo 一橋大学特別研究員・本学非常勤講師、博士（学術）、言語学・日本語教育・韓国語教育

件の違いを明らかにすることを目的とする。具体的には、次のような過去形の使用を分析の対象とする。

(1) (カードだらけの財布から必要なキャッシュカードを見つけ出して)

- a. あっ、{?ある、あった}。
- b. 어, {있다, ??있었다}.
- e, {issta,??iss-ess-ta}.
- あ、ある あった

(2) (BがAが作ったキムチを食べていて顔色が変わったのを見て)

A: a. どうした? {辛い、辛かった} ?

b. 왜?{매워, 매웠어}?

way?{maywe, mayw-ess-e}?

どうした からい からかった

B: a. うん、ちょっと {辛い、辛かった}。

b. 어, 좀 {매워, 매웠어}.

e,com {mayw, mayw-ess}-e

あちょっと からい からかった

(1)では、キャッシュカードを見つけだすといった発見の文脈で、日本語ではある、韓国語ではiss-taという状態述語が使用されている。そして、日本語では現在形の使用は不自然だが、過去形の使用は自然になっている。それとは反対に、韓国語では現在形の使用は自然だが、過去形の使用は不自然になっている。(2)では物が発見されているわけではないが、当該のキムチが辛いという事実が発見されるといった文脈で、日本語では辛い、韓国語ではmayp-taという状態述語が使用されている。この文脈では、日本語も韓国語も共に現在形、過去形の使用が自然になっている。

発見の文脈で使用される過去形は、いわゆるムードの夕であり、通常使用される過去形とは振る舞いを異にする。通常、過去形が自然に使用される状況では、会話の含意により当該の述語を現在形に変えた文は偽であることが推論されるた

め、(3)のように同一文脈での使用は累加のモ等がなければ不自然になる。

(3) (友人の中村を紹介するという状況で)

中村は学生だった。そして今# (も) 学生だ。

しかし、本論文で扱う発見の文脈の過去形は同一文脈で現在形が使用されても自然になる。

(1') あ、あった。ある、ある！

(2') B: a. うん、ちょっと辛かった。ちょっと辛いね。

b. 어, 좀 매웠어. 좀 맵네.

e. com mayw-ess-e. com mayp-ney.

あ、ちょっと 辛かった ちょっと からいね

このような特徴を持つ過去形の使用はそれぞれの言語において、どのような原理に従って使用されているのであろうか。

2. 先行研究

従来日本語と韓国語の時制の対照研究において、意味論と語用論の両者にまたがるような研究は管見の限り、これまであまりなされてきていない。そのような中、井上・生越・木村(2002)は、この分野において大変重要かつ示唆に富む観察および一般化を行っている。具体的には、(4)-(6)のような観察を行い、日本語と韓国語の状態述語の現在形と過去形の使用に関して、(7)のような一般化をしている。

(4) (子供が生まれて、病院から実家に電話をかけている。子供の性別を聞かれて)

a. 男だよ。 / 男だったよ (=見たら男だったよ)。

b. 아들이예요./ #아들이었어요.

atul-ieyyo./ #atul-i-ess-eyo.

男の子 です 男の子 でした (井上・生越・木村(2002,p.127,(6)))

(5) (電話帳で井上の名前を探している)

a. えーと、井上、井上…。あった (=ここを見たらあった)。

b. 있다./#있었다.

iss-ta./#iss-ess-ta.

ある あった (井上・生越・木村(2002,p.128,(8)))

(6) (探しても見つからなかった傘が予想外の場所で偶然見つかった)

a. あ、ここにあったのか (=本当はここにあったのか)。

b. 아, 여기 있었네.

a! yeki iss-ess-ney.

あ ここに あった 気づき (井上・生越・木村(2002,p.129,(10)))

(7) a. 発見の文脈において、眼前の状態や現存する対象の恒常的属性について、「観察したら…だった」という意味では、日本語は過去形を用いることができるが韓国語はできない。

b. ただし、同じく発見の文脈において、眼前の状態や現存する対象の恒常的属性に関する発話時以前の認識を修正するという意味では、日本語も韓国語も過去形を用いることができる。

c. 過去の夕とは別に発見の夕があるわけではない。

井上・生越・木村(2002)は、「観察」という行為がなされたかどうか、及び「認識」の修正が行われたかどうか、発見の文脈での過去形の使用、不使用に深く関わるという極めて重要な正しい指摘をしている。しかし、「観察行為」とはそもそもどのような行為であるかや、「観察行為」と「認識の修正」の関係が明示されておらず、過去形の使用が可能であるかどうかについて十分な予測ができないような状況が存在する。また、発見文脈において、「認識の修正」がなされていないような状況で韓国語の過去形が自然に使用される状況もある。本論文

では、井上・生越・木村（2002）をベースとして、より詳細な観察を加えることにより、更なる一般化を試みる。

続く3節では「観察行為」と認識の関係について検討し、本論文における主張を行う。また、4節でそれに基づき具体的な例について検証を行う。

3. 観察行為と認識⁽¹⁾の変化・知覚の変化

本節では観察行為と知覚及び認識との関係について検討する。

まず、知覚と本論文で問題としている観察行為との関係について考えたい。知覚状態については次の2通りのいずれかである。

(8) a. pという知覚状態にある。

b. pという知覚状態にない。

そして、本論文で問題としている観察行為とは、ある知覚状態から別の知覚状態への変化として定義しなおすことが可能である。また、pという知覚状態に至る場合の知覚の変化は次の2通りのいずれかとなる。

(9)

	ある時点以前の知覚状態	ある時点以後の知覚状態
A	p	p
B	ϕ ⁽²⁾	p

そして、日本語の過去形が使用されるのは、Bの知覚状態の変化があった場合、またその時に限ると考える⁽³⁾。

(10)

	ある時点以前の知覚状態	ある時点以後の知覚状態	日本語の過去形使用
A	p	p	×
B	φ	p	○

(ただし○は過去形の使用が自然であることを×は不自然であることを表す。)

次に本論文で問題にしている観察行為、すなわち知覚状態の変化と認識との関係について考えてみたい。まず、認識は次の3通りのいずれかの状態であると言える。

- (11) a. pという認識がある。
 b. pという認識も¬pという認識もない。⁽⁴⁾
 c. ¬pという認識がある。

従って、pという認識状態に至る場合の認識の変化は次の3通りのいずれかとなる。

(12)

	知覚変化前の認識状態	知覚変化後の認識状態
a	p	p
b	φ	p
c	¬p	p

(12)の枠組みに井上・生越・木村(2002)の一般化を適応すると、次のようになると思われる。

(13) 井上・生越・木村（2002）から得られる予測

	知覚変化前の認識状態	知覚変化後の認識状態	韓国語の過去形使用
a	p	p	×
b	φ	p	× ⁽⁵⁾
c	¬p	p	○

これに対し、本論文ではbの状況は2種に分けることができ、韓国語の過去形が使用できる状況と使用できない状況が存在すると主張する。より具体的には以下であると主張する。

(14) 本論文の主張

	知覚変化前の認識状態	p/¬pに関する予測の文脈上の必要性	知覚変化後の認識状態	韓国語の過去形使用
a	p	— ⁽⁶⁾	p	×
b1	φ	無	p	×
b2	φ	有	p	○
c	¬p	—	p	○

b1の状況は、p又は¬pに関する認識を持つことが文脈上必要とされていない状況である。この状況は、より具体的には、pであるか¬pであるかの予測が必要とされていない状況である。文脈上p又は¬pの認識を持つことが求められていない状況でその認識を持たないというのは、ある意味自然なことであると言えるだろう。この状況下では韓国語の過去形の使用は不自然になると本論文では考える。

一方、b2の状況はp又は¬pに関する認識を持つことが文脈上必要とされているにも関わらず、何らかの理由によりその認識を持たないような状況である。このような状況下では韓国語の過去形の使用は自然になると本論文では考える。

以上のこと、及び知覚変化前にpと知覚していれば必ずpという認識を持つと

いうことから、日本語と韓国語の過去形の使用の本論文による予測は次のようになる。

(15)

	ある時点以前の知覚状態	ある時点以降の知覚状態	ある時点以前の認識状態	p/¬pに関する予測の文脈上の必要性	ある時点以降の認識状態	日本語の過去形使用	韓国語の過去形使用
0	p	p	p	—	p	×	×
a	φ	p	p	—	p	○	×
b1	φ	p	φ	無	p	○	×
b2	φ	p	φ	有	p	○	○
c	φ	p	¬p	—	p	○	○

4節では、(15)を検証する。

4. 検証

以下では、発見文脈における日本語と韓国語の過去形使用を、(15) で分けられた状況0から状況dの5状況に分け、(15) の予測の検証を行う。

4. 1. 状況0

状況0は、ある時点以前よりpという知覚を持っている状況、つまり知覚変化がない状況である。次の(16)はそのような状況の例である。

(16) (Bの家では生まれる前から犬が飼われており、Bはその犬をずっと見ているという状況で、電話の相手のAから)

A: 昨日、猫をもらったんだ。だから家に猫がいるんだ。Bさんちは？

- B: a. うち？犬が {いる、?いた}。
b. 우리집?개가 {있어, ?있었어}.
wulicip? kay-ka {isse, ?iss-ess-e}.
うち？ 犬が {いる、いた}

このように、状況0では、日本語も韓国語も過去形の使用は不自然になる。

4. 2. 状況a

状況aは、観察以前も以後もpが真であるという認識を持っているが、pという知覚を持たない状況からpという知覚を持つ状況に変わったという状況である。次の(17)から(19)はそういった状況の例である。

(17) (東京タワーで以前も利用したことがある望遠鏡にお金を入れた瞬間)

- a. おっ、{見える、見えた}。
b. 어,{ 보인다, ??보였다}.
e, {pointa, ??poy-ess-ta}.
あ、みえる みえた

(18) (カバンの中に入れっぱなしの財布を整理されていないカバンの中から見つけだして)

- a. あっ、{#ある、あった}。
b. 어,{ 있다, ??있었다}.
e, { issta, ??iss-ess-ta}.
あ、ある あった

(19) (BがAの家まで車で向かっている途中の携帯電話での会話で、Aの家のそばにある、よく知っているセブンイレブンが目に入って)

- A: 今どこ？
B: a. ええと。。。あっ、セブンイレブンが {??見える、見えた}。もうすぐ着くよ。

- b. 어...아!세븐일레븐이 {보여, ??보였어}. 좀 있으면
e... a! seypunilleypun-i {poye,?? poy-ess-e}. com iss-umyen
ええと、あ！セブンイレブンが 見える 見えた 少し すると
도착해.
tocakhay.
着く

このように、知覚の変化はあるが認識の変化がない状況では、日本語は過去形の使用が自然だが、韓国語では不自然になる。

4. 3. 状況b

状況bは、観察以前はpが真であるかどうかに関する認識を持っていなかったが、pという知覚を持たない状況からpという知覚を持つ状況に変わったことによりpが真であるという認識を持つに至ったという状況である。以下、状況b1、b2について順に見る。

4. 3. 1. 状況b1

状況b1は状況bのうちp又は¬pに関する認識を持つことが文脈上必要とされていない状況、より具体的には、pであるか¬pであるかの予測が必要とされていない状況である。

(20) と (21) はそのような状況の例である。

(20) (いつも母親は分量をはからないでケーキを作るため、ケーキが甘いとも甘くないときもあることを知っており、そういうものだと思っている子供が、母親が作ったケーキを食べながら)

- a. お母さん、今日のケーキは {甘い、甘かった}。
b. 엄마, 오늘 케익은 {달다, ??달았어}
emma, onul kheyik-un {tala, ??tal-ass-e}
お母さん 今日 ケーキは 甘い 甘かった

(21) (Bが今まで訪ねたことがないAの家まで車で向かっている途中の携帯電話での会話で、今まで見たことがないセブンイレブンが目に入って)

A: 今どこ？

B: a. ええと。。。あつ、セブンイレブンが {??見える、見えた}。この道でいい？

b. 어.. 아! 세븐일레븐이 {보여, ??보였어}. 이 길로 가면

e.. a! seypunilleypun-i {poye,??poy-ess-e}. i kil-lo kamyen

ええと、あ！セブンイレブンが 見える 見えた この道 で 行けば
돼?

toay?

なる

(20) では、当該日のケーキが甘いか甘くないかの予測がそもそも持てず、また予測が求められていない状況であると言える。また (21) は、初めて訪れた場所であり、そこにセブンイレブンがあるかどうかについて予測が必要とはされていない状況であると言える。

このように、状況bのうちp又は¬pに関する認識を持つことが文脈上必要とされていない状況では日本語の過去形は自然だが、韓国語の過去形は不自然になる。

4. 3. 2. 状況b2

b2の状況はp又は¬pに関する認識を持つことが文脈上必要とされているにも関わらず、何らかの理由によりその認識を持たないような状況である。

p又は¬pに関する認識を持つことができない理由としては、例えば以下のようなことが考えられる。

(22) pを予測させる情報も¬pを予測させる情報も共に話者が所有し、どちらの情報もより信頼できる情報であるかの判断がつかない。

(23) はそのような例である。

(23) (AとBが外国に旅行に行って猿のショーを見ようをしている。入場料が日本円で約2000円だとする旅行情報誌と、無料だとする情報誌があり、どちらが正しいのかAもBも全くわからなかった。そこでBがこのショーが行われて入る会場に行き、入場料がいくらであるかを確認した後で)

a. A : 入場料は ?

B : うん、{無料だよ、無料だったよ}。

b. A : 입장료는?

ipcanglyonun?

入場料は

B : 응, {무료야, 무료였어}.

ung, {mwulyoyoya, mwulyoyoy-ess-e}.

うん 無料だ 無料だった

(23) では、サルショーの入場料について2000円であるという情報と無料であるという異なる予測をさせる情報が存在している。このように互いに矛盾し合う情報を持ち、信頼すべき情報がどちらであるかの判断がつかない状況では日本語においても韓国語においても、過去形が用いられた発話は自然になる。

また、 p 又は $\neg p$ に関する認識を持つことができない別の理由としては、次のようなものも考えられる。

(24) p や $\neg p$ に関連すると思われる情報は持っているが、それらが整理されておらず、 p と $\neg p$ ととも予測をたてることができず、 p あるいは $\neg p$ という認識を持つことができない。

(25) はそのような例である。

(25) (これまでの息子の算数のテストの点数は良かったり悪かったりバラバラである。両親はその傾向を把握し、不得意な分野を集中的に勉強させる等して、恒常的に高得点をとれるようにさせたいと考えている。しかし、その傾向がつかめず、どう対処すれば良いかと悩んでいるという状況で)

a. 夫：今回のテストはどうだった？

妻：（テストを見ながら）うん、今回は {100点だ、100点だった}。

b. 남편: 이번 시험은 어땠어?

ipon, sihemun ettaysse?

今回 試験は どうだった

아내: (시험지를 보면서) 어, 이번은 {100점이야, 100점이었어}.

(sihemcilul pomyense) e, iponun {100cemiya, 100cemi-ess-e}.

テストを 見ながら うん 今回は 100点だ 100点だった

(25) の妻は、今回のテスト以前に行われた多くのテストの結果を知っており、それらを正しく分析できれば、今回のテストの点数についての予測をたてることができたかもしれない。しかし、実際は分析することができず、今回の試験が良いか悪いかについて予測を立てられていない状況で、今回の試験について100点であるという知覚を得ている。このように、様々な情報を持ち、そこから正しい予測をたてることが可能かもしれないが、話者の能力不足等が原因で予測をたてることができず、 p あるいは $\neg p$ という認識を持ってない状況では、日本語も韓国語も過去形の使用が自然になる。

このように、状況bのうち、 p 又は $\neg p$ に関する認識を持つことが文脈上必要とされているにも関わらず、何らかの理由によりその認識を持ってないような状況では、日本語も韓国語も過去形の使用が自然になる。

4. 4. 状況c

状況cは、観察以前は $\neg p$ が真であると思っていたが、 p という知覚を持たない状況から p という知覚を持つ状況に変わったことにより、認識を $\neg p$ から p へと修正しなければならなくなった状況である。(26)、(27)はそのような状況の例である。

(26) (いつも母親が作るケーキは甘くなく、今回も甘くないのだろうと思いながら、母親が作ったケーキを食べ始めて)

- a. あれ、今日のケーキは {甘い、甘かった}。
- b. 에이, 오늘 케익은 {달아, 달았어}.
eyi, onul kheyik-un {tala, tal-ass-e}
あら 今日 ケーキ は 甘い 甘かった

(27) (腕時計を探しているがなかなか見つからず途方に暮れていたところ、母親に机の上を見てみたらと言われ、すでに何度も探して見つからなかったのに、今度は見つかったという状況で)

- a. あれ、{ある、あった}。
- b. 어머, {있다, 있었다}.
emo, {issta, iss-ess-ta}.
あれ、 ある あった

このように、知覚の変化があり、その知覚変化に基づき、 $\neg p$ から p へと認識が更新されるといった状況では、日本語も韓国語も過去形の使用が自然になる。

6. おわりに

本論文では、発見の文脈における日本語と韓国語の状態述語の過去形の使用条件の違いを明らかにした。特に、韓国語において、従来の研究では取り上げられなかったb2のような状況においても過去形の使用が自然になることを指摘した。

付記

本論文は、2010年8月1日に政治大学（台北）で開催された2010世界日本語教育大会で筆者達が口頭発表した「日本語と韓国語のテンス」に大幅に加筆修正を施したものである。会場にて有益なご意見を下さった方々にこの場を借りて御礼申し上げます。もちろん、本論文の不備や誤りはすべて筆者らの責任である。

注

- (1) 本論文における認識とは、おおよそ「～と思う／思っている／見做す／見做している」と述べることができる事柄である。本論文での認識とは知識を含む概念であり、推論に基づき得られた「暫定的知識」と「知識」からなるものである。井上・生越・木村（2002）における認識の概念と同一のものであるかどうかは定義がないため確認はできないが、以下では同一のものであると見做し議論している。
- (2) ϕ はpや-pの知覚又は認識がないことを表す。
- (3) 日本語の過去形の使用に関する本論文の捉え方は、井上・生越・木村（2002）と基本的に同一であり、新たな提案は特にない。
- (4) 注2で既に述べた通り、 ϕ で表す。
- (5) 言葉の定義のみを考えると（13b）の認識状態の変化は認識の修正にあたり、井上・生越・木村（2002）では、韓国語の過去形が使用されることを予測するとの解釈も可能かもしれない。この解釈からすると、（13b）は○となる。しかし、(4)で韓国語の過去形が使用できないことを認識の修正がないためであるとしていることから、井上・生越・木村（2002）の認識の修正とはいわば認識の訂正に限られているように見える。このため、本論では（13b）は×としておく。ただし、すぐ後に見るように、本論文では（13b）は○のケースと×のケースがあると考えていることから、いずれにせよ、井上・生越・木村（2002）の予測とは異なる予測を生むことになるものと思われる。
- (6) aとcについては、知覚変化前に既にp又は-pの認識を持っているため、文脈に関わらず予測の必要がない。
- (7) 状況0は本来、発見文脈とは言えないが、他の用法と対比させるために念のためここに記述しておく。

参考文献

- ・井上優（2001）「第3章 現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房。
- ・井上優・生越直樹・木村英樹（2002）「テンス・アスペクトの比較対照 - 日本語・韓国語・中国語『対照言語学』東京大学出版会。

- 生越直樹 (1995) 「朝鮮語 ㄷ다形, ㄹ다形 (하고있다形) と日本語シタ形,シテイル形」『国立国語研究報告110研究報告集16』。
- 生越直樹 (1997) 「朝鮮語と日本語の過去形の使い方について」『日本語と朝鮮語』下巻国立国語研究所、くろしお出版。
- 生越直樹・井上優 (1997) 「過去形の使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合」『日本語科学1』国立国語研究所。
- 金水敏 (1998) 「いわゆる‘ムードの『タ』’について—状態性との関連から—」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 pp.170-185、汲古書院。
- 金水敏 (2001) 「4. テンスと情報」音声文法研究会編『文法と音声』Ⅲ、くろしお出版、pp. 55-79。
- 齊藤学 (2010) 「『ムードのタ』」『2010年中華大学応用日語学系創系記念暨第一屆国際学術検討会論文集』 pp.69-80。
- 齊藤学・崔榮殊 (2009) 「過去形の使用と知識管理」『日本学報』78、韓国日本学会、pp.37-46。
- 定延利之 (2004) 「ムードの『た』の過去性」『国際文化学術研究』第21号、神戸大学国際文化学部紀要、pp.1-68。
- 寺村秀夫 (1971) 「‘た’の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」岩倉具実教授退職記念論文集『言語学と日本語問題』くろしお出版、『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』再録。
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院[くろしお出版より復刊、1972]。